平和な社会の実現に向け
世界の次世代リーダーと考える

対話が拓く未来

笹川平和財団
Think, Do, and Innovate-Tank

社会の平和と安定を図るために、各国の次世代リーダー同士の対話を進める笹川平和財団の動きを6回シリーズで追う。

第2回

多様な参加者と考えるそれぞれの平和

さまざまな背景を持つ世界各地の学生が広島に集い、被爆地が歩んできた平和への道のりを学び、議論を深めた。その経験は、それぞれの平和の実現に向けた活動の大きな一歩となる。

積極的平和の実現に向けたワークショップで議論する参加者たち

広島で学びを共有し、行動へ

平和都市広島で平和について学び、プログラムの参加者同士が強力なネットワークを築き、互いに助け合いながら、それぞれの国や社会の安定と平和の実現に向けて歩んでほしい―。この「広島サマープログラム」には、そんな思いが込められている。

プログラムのタイトルに題された「積極的平和」とは、戦争といった直接的な暴力だけでなく、貧困や差別などから生まれる暴力も取り除かれ、人々が公正で持続可能な社会関係を築ける状態を指す。戦争や暴力行為が存在しない状況を示す「消極的平和」から、さらに進んだ平和の形だ。

笹川平和財団は今回、このプログラムにフィリピン、インドネシア、シリア、ミャンマー、インド出身の14名を招へいした。自国で社会課題に関する調査や実践を行っている者や、紛争の当事者など、それぞれが複雑な背景を抱える中、国家、民族、宗教などの違いを超えて、決して一つではない平和に向けた道筋について対話を重ね、経験や考えを共有する。参加者は「折り鶴フェロー」の称号を与えられ、今後、このプログラムでの学びを生かし、それぞれの立場で平和に向けたアクションを起こしていく。

対話と共感の重要性を実感

「想像を絶する悲劇の後でも平和を育むことができるとわかった。被爆者の証言を聞き、歴史上のその傷を認めつつ、対話と共感を促すことが和解のために不可欠であると実感した」。そう語るのは、インド北東部アルナーチャル・プラデーシュ州から参加したムダン・オンジュさんだ。

インドの他の地域と細い回廊でつながる北東部に位置するこの州には100以上の部族が存在する。部族間の緊張や、近隣国からの移住・難民問題に関連する争いが社会的対立を引き起こすことが少なくない。オンジュさんは地元の大学で、文化や部族間の断絶などを通じた社会の変容について研究している。

「広島では、被爆者、教育者、地域団体、政策決定者、公的機関などが緊密に連携し、共有する平和へのストーリーを普及させ、分断ではなく共生に焦点を当てる。この参加型アプローチにより、平和構築はトップダウンのプロセスではなく地域の人々が主体的に取り組むものとなっている」と述べるオンジュさん。帰国後は、異なる部族同士や若者団体、地域NGOとの対話を始め、互いの背景を理解し、共感を育みたいとこの先を見据えた。

ゲストスピーカーの一人、国際協力機構（JICA）で、長年、平和構築に携わる室谷龍太郎氏（左）に質問する参加者ら。ムダン・オンジュさん（左から2番目）は「講義で聞いた難民や移民への取り組みから、人々は民族の違いに関わらず、共に生きる意志があれば共存できることを学んだ」と語る

積極的平和を推進する

内戦が続くミャンマー出身のフルワン・パイン・ティハさんは、積極的平和に向けたワークショップを通じて、「紛争地域の人々は消極的平和すら享受できない場合が多いが、紛争が続いている中でも積極的平和を促進することが不可欠であると学んだ。さまざまな市民組織や草の根のコミュニティは、紛争にさらされている地域で活動する際、積極的平和の要素を取り入れる方法を模索する必要がある」と語る。

このプログラムでは、積極的平和の実現に向け、資源をめぐる対立の要因や、その打開に向けた実践的なアプローチを掘り下げる。現在、タイの大学で持続可能な都市開発政策について学ぶフルワンさんは、広島・江田島でのフィールドワークで、島の持続可能性や生態系について、島の人々が高い意識を持っていることに感銘を受けたと言う。紛争後のミャンマーで持続可能な都市や農村政策をつくっていくためには、「地域への教育が重要」との学びから、今後はオンラインなども利用し、ミャンマーの若者やコミュニティに、今回のプログラムで得た知見を共有していきたいと述べた。

笹川平和財団は今回、このプログラムに14名を招へいした。右列手前から2番目がフルワン・パイン・ティハさん

参加者たちは自らの学びを生かし、今回培ったネットワークも活用して、それぞれの平和への模索を続けていく。

今回の対話 広島サマープログラム　積極的平和と持続的な社会の推進

笹川平和財団、広島大学、米コロンビア大学が共催する本プログラムは、今年で3回目となる。紛争の当事者などさまざまな背景を持ちながら平和な社会の実現を目指す学生が広島に集う。被爆者、平和構築・紛争マネジメントの実務家や研究者といったゲストスピーカーによる講義とワークショップ、さらに地域コミュニティでのフィールドワークを通じ、参加者は対話を重ね、それぞれの立場で平和への道のりを考える。今年のプログラムには延べ20カ国から45名が参加した。

8月6日に行われた広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式にも参列

From フィリピン 経済発展と環境保全の両立を目指す

2024年度広島サマープログラム参加　アラ・ケイ・L・エスペニードさん　フィリピン・ミンダナオ州立大学 講師（プログラム参加当時、修士2年）

私はフィリピン南部ミンダナオ島のカラガ地方の出身です。ここは鉱業の街として知られていますが、環境破壊や鉱山会社と地域住民との対立など、天然資源の持続可能な開発に向け、さまざまな課題を抱えています。その問題意識から、私はインダストリアル・ピース（産業平和）をテーマに研究しています。

広島サマープログラムでは、甚大な被害を受けたにもかかわらず、地域社会を再建してきた広島のたくましさを目の当たりにしました。また、江田島でのフィールドワークでは、人間と自然が調和を図りながら共生する日本の「里海里山」の概念を学んだことで、鉱業地域のコミュニティが経済発展と環境保全をどう両立させていくか、探求していこうと考えるようになりました。この学びを大学の授業での議論に取り入れ、学生たちと共にさらに深めていきます。

ミンダナオ島カラガ地方にある鉱山管理組合を訪れたアラ・ケイ・L・エスペニードさん（中央）と、鉱山の女性作業員たち